

再臨のキリストによる
第3福音書

ヘルメスの杖・下

—大錬金術—

*THE GOSPEL
BY CHRIST OF*

THE SECOND COMING No. 3

CADUCEUS second volume

V

SEIDOU

SEIDON

正道

目次

ヘルメスの杖・下	
第3福音書	3
座標10 ルベド（続き）	4
全体の目次	7
第4章 アルベドとルベド	
（1）グラデーション・スケール	11
（2）顕教の優位	13
（3）真理との距離	17
（4）求めるものの違い	22
第5章 神に干渉する人間像	
（1）合一と等化	29
（2）神への干渉	32
（3）予言からの超出	36
第6章 人間＝神、神＝人間	
（1）闇に接する神	43
（2）人格を持った神	46
（3）異端から正統へ	49
第7章 神と黄金	
（1）物質としての金	53
（2）小宇宙と大宇宙	56

ヘルメスの杖・下

第3福音書

再臨のキリストによる
第3福音書

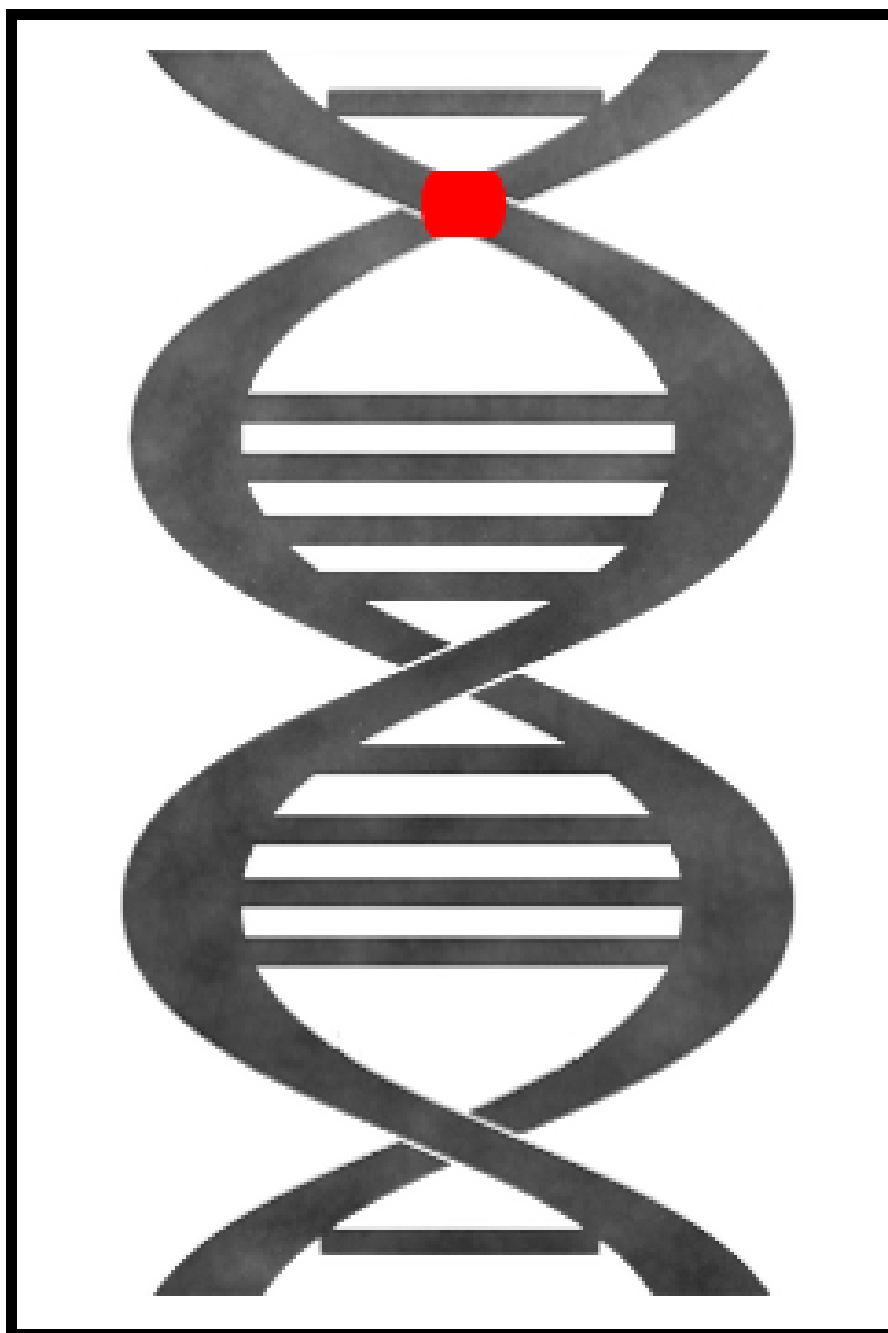
ヘルメスの杖・下

——大錬金術

同時性的な現象は、たとえば、内的に認知された事象（夢、現像、予感など）が外的現実に対応を見出すとき、つまり、予感された内的なイメージが「本当のことになった」ときである。

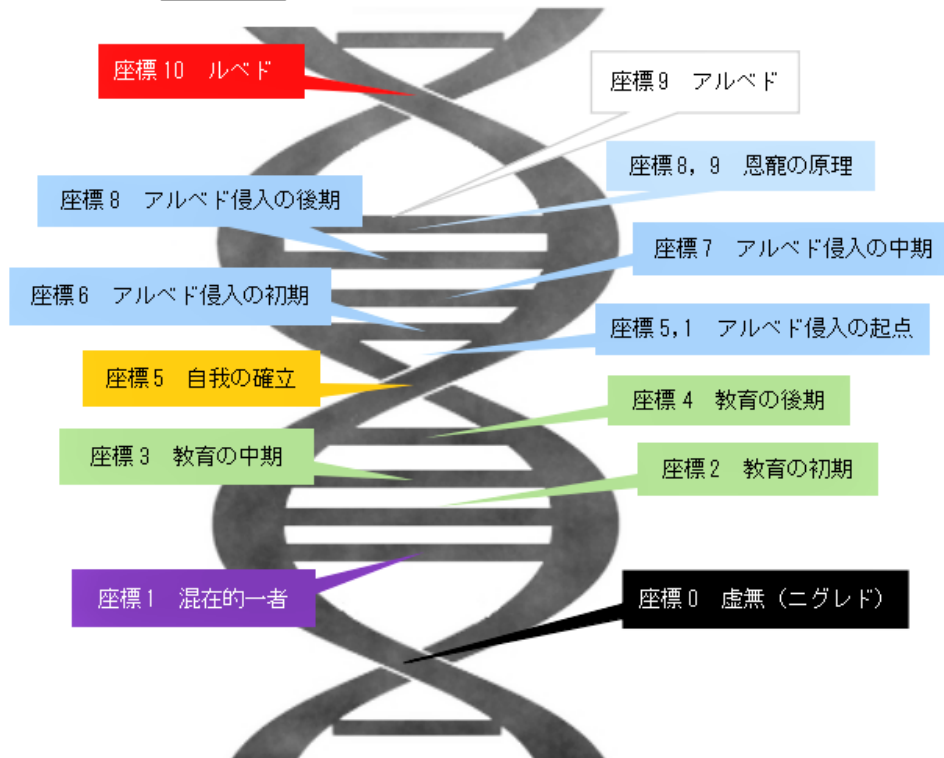
ヤッフェ編『ユング自伝2』河合隼雄他訳の巻末「語彙」から

座標 10 ルベド (続き)



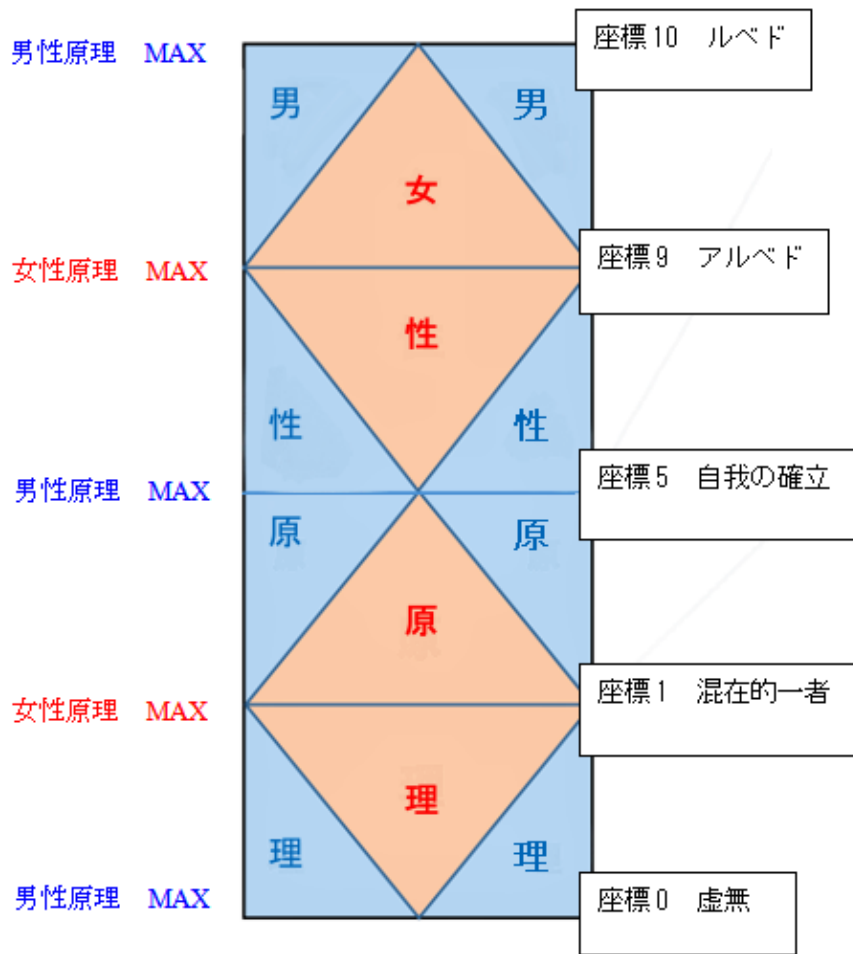
2022-12-06 \ (7 \).png

座標図



2022-05-26 \ (4 \).png

原理図



2022-05-26 \ (7 \).png

全体の目次

序 弁証法としての錬金術

座標9 アルベド

第1章 空間的にみるアルベド

第2章 時間的にみるアルベド

第3章 永遠の諸相

第4章 時空的に捉えるアルベド

第5章 倫理的にみるアルベド

第6章 マリア、イエス、パウロ

座標9～0 帰還と下降

第1章 アルベドについての追加考察

第2章 アルベドからの帰還と下降

座標0 ニグレド

第1章 虚無というアンチテーゼ

第2章 ディオニュソスの宗教

第3章 虚無による一致

座標10 ルベド

第1章 クレアティオ・エクス・ニヒロ

第2章 ジェネシス（創世記）

第3章 暁の太陽の真理

第4章 アルベドとルベド

第5章 神に干渉する人間像

第6章 人間＝神、神＝人間

第7章 神と黄金

第4章 アルベドとルベド

(1) グラデーション・スケール

闇から光にいたるグラデーション

ルベドにおいて行われる「虚無が存在を創造する」という営為は、換言すれば「闇が光を創造する」ということと同じである。

そして、闇と光という“両端”を与えられたならば、主体は、その両端を埋める“中間過程”をも認識することが出来るようになる。

つまり「無からの創造」を意識化した主体の中では「絶対の闇から始まり、絶対の光に到るまでの、光の増幅過程」までもが、新たな認識対象として見えてくるのである。

それを本書的に、かつ簡明に表現するならば、主体には「ニグレドから、ルベドに到るまでの過程が分かるようになる」ということになる。

そして、これをもう少し文学的に表現すれば「主体は、闇から光に到る、グラデーション・スケール（漸次的な物差し）を手に入れることになる」という文章になるだろう。

そうしてみると、この「漸次的な物差し」の目盛を読み解くことによって、主体は、あらゆる光の増幅段階を、すべて説明できるようになるはずである。

すなわち、ほとんど闇に等しい微光から、しだいに薄明、明光へと強まっていく光。そして、まさに光そのものであるアルベドや、そのアルベドを成立させている発光現象（ルベド）までを、すべて説明できるようになるのである。

「座標」の意味

言うまでもないが、この『ヘルメスの杖』は、まさに、そうした「グラデーション・スケール」を、神学論文の形にしたものである。

つまり「第二福音書」「第三福音書」を構成している、0～10までの座標は、これを換言すれば「グラデーション・スケールの、物差しの目盛り」に他ならないのだ。

要するに私は、この二つの福音書で、暗に、次のようなことを述べているのである。「では本書の読者に教えよう。グラデーション・スケールの各々の目盛に視点を合わせると、その時どんな心象景色が見えてくるかを」

そのさい、各座標の数値は、各々のステージにおける「光の量」を表すものになっていると言えるだろう。

だから当然、座標0では「光の要素が皆無」ということになる。

つぎの座標1は、月夜の薄暗がり。座標5で、地上的快晴といったところか。そこでは光も強いが、影も濃い（＝二元性）だろう。

座標9は、影を持たない「光そのもの」であるが、それ自体は“光源”ではない。それに対して、現在述べている座標10は「発光」あるいは「光源」という、まさに最高級の“光の絶景”であるのだ。

(2) 顕教の優位

顕教と密教

このグラデーション・スケールを持つ主体が、宗教家であったとしよう。その場合、彼の教えは、間違いなく「顕教」となる。

つまり主体は「すべての人々の前に顕わすことが出来る教え」を説けるようになる。それは、人類の全ての心境が、彼が持っているグラデーション・スケールのうちに盛り込まれているからである。

よって、ルベディアンルベディアンの教えは、人々のあらゆる心境を照らして、その全員に広く公開されることになる。

そして、かかる「顕教」の反義語が「密教」である。密教とは要するに「ごく限られた者にしか理解できない教え」であると言えるだろう。

本書において、この密教にあたる教えが、アルベディアンアルベディアンたちによる神秘主義思想である。

事実、神秘主義の内容は、それを学ぶ者がアルベドの段階に達しないかぎり、真には理解することができない。

無限、永遠、救済、これらは、いずれも“アルベドに達して初めて”その言葉の、本当の意味を知ることが出来るのである。

だからこそ昔、中国密教のマスターである恵果和尚は、いつまでも正統な後継者を見出せなかったのだ。彼はアルベディアンアルベディアンとして、自分の前に、自分と同等のアルベディアンアルベディアンが現れるのを、ずっと待ち続けたのである。

恵果は、ついに晩年になって、日本から渡来した空海を、自分の後継者として指名することが出来た。空海もまたアルベディアンアルベディアンであったからだ。

しかしそれは、何という危うい「教えの継承」であったことだろう。

恵果と空海では、年齢も離れていたし、住んでいる国も離れていた。その遠く離れた人生が、まさに稀有なる出会いによって、すれ違うギリギリのところで、ようやく結びついたのだ。

それはまさに「断絶する間際の、奇跡的な理念の継承」であった。

この点に関し、顕教は、はるかに有利な「理念継承の性質」を持っている。

というのも顕教は、その教えを学ぶ者を導いて、彼をアルベディアンアルベディアンにもするし、ルベディアンルベディアンにもするからである。しかも、ほとんど相手を選ぶこともなしに。

いや、当然その教えの中には、各座標をクリアするという「厳しい修行の要請」が含まれているだろう。

だが、顕教には“育成”の要素が強く根を張っている。ならばその育成の理念によって、出来ないものは、出来るようにしてしまえばよい。

よって彼には「アルベディアンとして出来上がった者が来るのを、気長にいつまでも待つ」などという義理も必要性もないのである。

イエスと仏陀の顕教

キリスト教は、それ自体としては、神秘主義（アルベド）の要素が強い宗教である。イエスの愛は、アルベドにおける自他一体の言い換えであるし、イエスの救済は、まさに霊的な母性的寛容の表れだからである。

しかし、キリスト教が、旧約の律法（二元的な教え）を吸収して、自己の正典を「旧約新約の連結聖書」にしたとき、それは「顕教」と呼べるものになる。

そのようにすれば、座標（＝グラデーション・スケール）の大部分が、クリスチャンの視界に入ることになるからだ。

事実、旧約と新約の『聖書』は「予言と予言の成就」という繋がりによって、固く結びついている。

またイエスは、旧約の律法を否定することなく、むしろ自分を「律法の完成者である」と宣言した。もしイエスに「旧約と新約の連結」の意欲がなかったら、決してそのような事は言わなかったに違いない。

一方、釈迦仏教（原始仏教）は、何の補助を受けなくとも、それ自体で「顕教」である。

というのも、仏教には「欲界、色界、無色界」という「三界の思想」というものがあるからだ。これは、言うなれば「悟りの段階論」に他ならない。

やや詳しく言えば、おおよそ、欲界が「教育の段階」に該当し、つぎの色界が「自我の確立段階」ということになるだろう。そして無色界が「アルベド侵入」の段階に相当することになる。

特筆すべきは、無色界の最上段階として「有頂天」というステージがあることだ。これは要するに「アルベド自体」のことを指しているのだろう。

このように、仏教には『ヘルメスの杖』によく似た段階論があるのである。

対機説法が顕教を作る

ところで、イエスも仏陀も、よく例え話をういたという。

それは彼らが、己の教えを聞いている人の理解度（機根）を、よく見抜いていたこと。そして、その機根に応じて、つねに「相手が分かる程度の教え」だけを説いていたことを意味している。

また、イエスや仏陀は、ある同一の教えを説くときにも、一般信者と、中枢的な弟子

とでは、その説明の仕方に変化を持たせていた。

つまり、分からない者には易しく、分かる者には率直に語っていた。このこともまた彼らが、話す相手の理解度を「段階的に差異があるもの」として想定していた証拠となるだろう。

そして、そんなイエスや仏陀の言行録を作るとすれば、それは当然「対機説法の集積」となるはずだ。

この対機説法とは、要するに「相手の機根に応じた教え」のことである。彼らの言行録の中には、これが集積されることになる。

そして、そのようにして集積された対機説法を、段階的、階層的に整理すれば、それは、いわゆる「法」となる。仏法の「法」である。

法とは、本質的には、我々の知る「グラデーション・スケール」に他ならない。つまり「あらゆる光の段階を、すべて説明できる、漸次的な心境の物差し」である。

もっとも、より一般的な理念としての法は「進展性を内包する法則」のことを言うのであるが。

そして結局のところ、この「法」を持つ宗教が「顕教」なのである。よって、イエスや仏陀は「対機説法を継続することによって、自身の法（顕教）を作った」と言うことができる。

あるいは、もっと現実に即した言い方をすれば「イエスや仏陀の弟子たちは、師の対機説法を集積、整理して法（顕教）を作った」とも言えるだろう。

法にあたる言葉がないキリスト教

もっとも、仏教の場合は「仏法」とか「ダルマ（法）」といった適切な語があるのに、他方のキリスト教にはそれがない。

というのも、キリスト教では、表向き「↑」の教えが説かれなかったからである。

「↑」、つまり「人間の神化」とは、換言すれば「努力による段階的進展」である。

しかし「↓」偏重のキリスト教では、ご存じのように「↑」が全くの不要とされた。そのため「法」に類する語を作る必要もまた、全くなくなってしまったのである。

例えて言えば「何事も、登る時には、梯子か階段（＝段階）が必要であるが、降りるときには滑らかなスロープで事足りる」ということである。

だから「↓」を説くだけならば、そのとき段階論は不可欠“ではない”のだ。それは別に、なくとも困らない。

その結果として、純粋な「↓」の宗教であるキリスト教に、「法」という概念は、とうとう今日の今日まで根付かなかったのである。

だから、私がキリスト教の「法」と言う場合には、それは福音書（イエスの言行録）に潜んでいる「潜在的な法」を指していることになる。

そう、悲しいことに私は今、キリスト教については、飽くまでも“潜在的になっている”法を、顕教であると想定して語っているのである。

だから、一般的な「史的キリスト教」を念頭に置くならば、いま私が「やや無理を通している」ことは認めざるを得ない。

とはいえ、上述の考え方からすると、旧約聖書を取り込んだとき、イエスの教えは確かに「法」になる。

またカトリックは、二元的なプロテスタントの教えを取り込んだときに「法」となる。

神秘体験以上の悟りの産物

しかし、こういった、万人に開かれている「法」「顕教」を、アルベディアン（神秘主義者）たちは、むしろ批判的に眺めた。

すなわち彼らは、

「顕教とは、自分たちが持っている秘教、密教よりも劣ったものだ」と考えたのである。

その批判的態度の出どころは、彼らの“低次な”エリート意識にあったことだろう。

アルベドの悟りは、その性質上「分かる者にしか分からない」というものになる。この性質は、容易にアルベディアンたちの、エリート意識につながっていく。

しかし、それは結局、アルベディアンたちが、神秘体験以上の悟り（グノーシス）を想定できなかったというだけの話なのである。

本書を読めば分かるとおりに、神秘体験（アルベド）の上には、ルベドの悟りがある。

そしてこのルベドの教えが、アルベドの教えより劣るはずがないのだ。なにせ、アルベドは「ある段階」の教えであるが、ルベドは「すべての段階」の教えなのだからである。

いちおう明確にしておく、顕教の「法」は、神秘体験以上の悟りの産物である。

同様に、神秘主義者たちよりも、イエスや仏陀のほうが、当然のこと優れている。密教よりも顕教のほうが、当然のこと優れているのである。

(3) 真理との距離

真理だが退屈な神秘主義

すでに何度か語ったことであるが、アルベドと神秘体験は一緒のものである。

そして一般に「神秘主義には故郷がない」と言われる。これは神秘主義（神秘体験）の地域的普遍性と、時代的普遍性を表している言葉だと言えよう。

事実、世界各地、あらゆる時代において、神秘体験についての内容が、ほとんど同じような口ぶりで語られている。

具体的には「無限」「一者性」「永遠」「霊的な母性」「救済」といった言葉が、口々に語られている。

それは確かに、神秘主義が「時空を超えた普遍的真理」であることを、雄弁に証明していると言えるだろう。神秘主義は、決して個人所有の「パーソナルな真理」ではないのである。

しかし、神秘主義者たちの告白表現は、つねに断片的である。また、きわめて抽象的でもある。

だから当然のこと、一般の人々には聞いていて分かりづらい。これは何としても否定できない事実と言わなければならない。

そうでなくとも、神秘主義の内容は、それを学ぶ者が「アルベドの段階」に達しないかぎり、真の意味では理解できないものである。

つまり「無限、永遠、救済」といった内容は、いずれも、これを学ぶ者が“アルベドに達して初めて”その本当の姿を顕すものなのである。

であれば、これがアルベディアン“以外”の人間にとって、皆目分からなくても仕方がないだろう。

それでいて、神秘主義者たちは、同じ内容を何度となく、同じ口調でもって繰り返して述べる。なにぶん、その情報内容が「ひとつの座標」に制限されているので、語るべき話題が少ないからだ。

要するに、彼らには、横のバラエティを広げることは出来ても、縦のバラエティを広げることが出来ないのである。そうなると自然、同じ話の繰り返しも増えてくる。

となるとこれは、それを日々聴くことになる、彼らの弟子や聴衆にとっては、かなり退屈を感じてしまう状況なのではあるまいか。

引き寄せられない、短時間の体験

しかし、このような欠点で、神秘主義者たちを責めるのは酷であろう。

少なくとも、彼らが「断片的、抽象的にしか、アルペドについて語れない」ことには、必然的な理由がある。そこには「彼らがアルペディアンである限りは、どうしても逃れられない事情」があるのである。

その事情の第一として、彼らが「意図的に、体験を引き寄せられない」ということが挙げられる。

つまり、自分が語るべき内容の確認作業をしたくても、アルペディアンには、それが全く思い通りにならないのである。

アルペドの体験は、いつだって先方（天）から、勝手に恵まれるものである。こちらが欲しがったから、即座に与えられる、という性質のものでは全くない。

実に不便なことであるが、恩寵の本質とは、そうした「純粋な他力」に他ならないのである。

そのうえ神秘体験は、その体験時間が、ものすごく短い。いやむしろ「短くてなんぼ」の世界なのである。これについては、すでに「アルペド体験の短時間性」という形で語ってある。

とはいえ、人が何かを記憶するためには、ある程度の「情報をインプットするための時間」が、どうしても必要だ。

たとえば、テストの暗記物を勉強するのにも、私たちは多くの時間を必要とする。私たちは、繰り返しテキストを読み返して、やっとその内容を覚えられるのだからである。

神秘体験だって、この点ではテスト勉強と何ら変わらないのだ。その内容を詳細に掴み取ろうとするならば、それなりの「学ぶための時間」は不可欠と言わざるを得ない。

だから「瞬時の体験」しか許されない神秘体験者は、往時のことを、あまり鮮明には記憶することが出来ない。また当然、それを後になって鮮明に思い出すことも、かなり難しいのである。

言葉が霧散してしまう事情

さらには、アルペドの体験時においては、言葉（伝達手段）が不要となってしまう、そうした特異な事情がある。

これがアルペディアンの「神秘体験の内容の持ち出し」を、なおのこと困難にする。

これは、自他一体、彼我一体、が徹底された「無限にして一」という場の、理論的帰結でもある。

すなわち、自分と他人、彼と私が一つであるならば、そこではもはや「コミュニケーション作業」が、まったくの不必要ごとになってしまうのである。

それにより、コミュニケーション・ツールの最たるものである「言葉」の存在意義が霧散してしまう。そこでは何も言わなくても、すべての内容が万人に共有されるのだから

らである。

これについては、自身もアルベディアンであった、文豪ゲーテの作品を見ると分かりやすい。

なにしろ彼は、神秘体験について「言い表しがたいもの（＝言葉を必要としないものが）ここでは成し遂げられる」という、的確しごくな言葉を、私たちに残しているのである。

この言葉は、ゲーテの代表作である『ファウスト』の終結詩句の一部である。

そしてまた、この作品の主人公であるファウストは、別のところで、積極的な言語不要論を披露してもいる。

それは物語の冒頭に近いあたりだ。そこでファウストは『ヨハネによる福音書』の有名な冒頭句を「わざわざ」「無理やりに」言い直してしまうのである。

つまりファウストは、そこに書かれている「太初に言葉ありき」という語句を改変して、勢いよく次のように言い直すのだ。すなわち「はじめに行為ありき」と。

しかも、その語句改変の理由について、ファウスト自身が、率直な説明をしてきている。そしてそれは「俺は言葉というものを、そう高く尊重できないから」というものなのだ。

そして、作者ゲーテがアルベディアンならば、ファウストがそのような告白（言語卑下論）をするのも、十二分に納得できるのである。その理由については、少し前のところで述べた。

結局のところ「神秘体験のさいに言葉を不要とした者」は、人々に「アルベドの情景」を“言葉で”伝えるのに、著しくその適性を欠いているのである。そのことが、上に紹介したファウストの態度にも明白に表れている。

実際「言語不要のものを、言語でもって伝達する」というのは、何としても座り心地の悪い文章ではなかろうか。

あまりにも近い真理

そしてもうひとつ。アルベディアンの場合、主体がアルベドと合一しているため、対象と視点とのあいだに適切な距離が取れない、という事情がある。

つまり、アルベドという対象と、主体の視点との間に、これっぽっちも“隙間”がないのである。

たとえば、鏡を覗かないかぎり、人は自分の顔の「涙ぼくろ」を見ることは出来ない。涙ぼくろを付けているのは自分なのに、その自分の顔を「鏡を持たない自分」は、全く見ることが出来ないのである。

それと同じように、アルベディアンにとって、アルベドの真理は、あまりにも自分に近いところにある。なにしろ彼は「それそのもの」になっているのだからである。

だから彼らアルベディアンに「客観的な」とか「俯瞰的な」という形での、アルベドの叙述は、到底無理なことになる。

いや、もちろん何もかもが無理な訳ではない。彼らに出来ることも少しはある。

先の涙ぼくろの例えでいうと、そこに触れた指先の感覚を頼りにして「たぶん、この辺りが、膨らんで黒くなっている箇所だ」と予測する程度のことは出来るのだ。

アルベディアンが出来ることも、大体それと似たり寄ったりである。

すなわち、アルベドの内容について「確かこうだったような…」という感覚的な記憶を呼び起こすこと。それにより不明確な告白を残すことぐらいは出来るのだ。

逆に言えば、それぐらいのことが、彼らに出来る“伝達”の限界でもあるのだが。

こうした事情を背負っているため、アルベディアンには、

「あんなに身近だった現象を、どうして、こうも思うように形容できないのだろう」

という苛立ちが常にある。しかし実際のところ、そのように「身近すぎる」からこそ、彼らは、涙ぼくろのように、それを明確に形容することが出来ないのである。

アルベドを離れてアルベドを眺める

これに対して、ルベディアンは、アルベドとの間に十分な“間”を取ることが出来る。換言すれば彼は、アルベドを俯瞰できる高さで、距離とを、保持することが出来るのだ。

というのは、アルベドとルベドは、固く結びついているものの、そこには、驚くほど遠い間隙もまた存在しているからだ。

それは、陸上競技における「スタートとゴール」が、一つに結ばれてはいても、互いに遠く離れているのと同じような事情である。

そして「ルベディアンである私」もまた、この間隙を挟んで、アルベドを遠くに眺めることが出来る。

それこそ、はるか遠くに放射的直線が見え、その全体像が、残らず私の視界に収まってくれるのである。

それは、あの涙ぼくろの例えで言えば「手に持った鏡に、自分の顔の全体が映っている」状態である。その鏡には、涙ぼくろであれ、目鼻であれ、「顔の輪郭の内側にあるもの」は、すべて収まってくれているのだ。

そのように、ルベディアンである私の視界には、アルベドの全体像が収まっている。

このため、私の「アルベドに関する叙述」は、客観的、かつ俯瞰的なものになる。神秘主義者のような断片的告白ではなく、アルベドについての、かなり“まとまりある”多角的描写が可能になるのだ。

本書の読者は、それを「座標9 アルベド」として、実際にその目で読んだことになる。

これに対する、各人の感想は様々あろう。だが、少なくとも、こうした「体系だった神秘主義的文章」は、これまで一文も存在していなかったのである。

仮に、過去の神秘主義者が、本書を実際に読んだとしよう。プロティノスでも、エックハルトでもよい。ともかく真正の神秘主義者が本書を手にとり、これをその目で読んだとする。

そうすると彼らは読書中、きっと「座標9」のところで、

「そうなのだ。私が言いたかったこと。言いたかったのに言えなかったのは、まさにこういう内容だったのだ。この筆者は、それを実際に書いてくれた」と言って、その溜飲を下げてくれることだろう。

ルベドの法

いま私は、私自身が「ルベディアンとして、アルベドの内容を包括的に述べた」という話をした。

それでは次に「ルベディアンが、ルベドの法を説く」とすれば、その内容は、一体どのようなものになるだろうか。この点について考えてみたい。

もっとも、その答えは、すでに前の節で提示してある。だから、ここで語るのは、一種の総括であることを告白しておこう。

まず基本的に、ルベドの法は段階論となる。その段階論によって、闇から光にいたるグラデーションを描写するのである。

したがって、座標1から始まり、座標0を經由し、座標10に到達した『ヘルメスの杖』上下巻は、この二巻の全体がすべて「ルベドの法」なのである。

つまり私は、ルベドの法を説くためにこそ、この『ヘルメスの杖』の全体を執筆したということなのだ。

アルベドの悟りは一つの座標に過ぎない。だが、ルベドの悟りは、グラデーション・スケールとなって、すべての座標の内容をカバーする。この差は極めて大きい。

もしかしたら、本書を読んで「アルベドの座標のほうが、ルベドの座標よりも、多くのことが書かれているのではないか」と感じる人もあるかもしれない。

しかし、もちろん実態はそうではない。なにしろ本質的には「第二、第三福音書全体が、ルベドの法である」と言っても、過言ではないのだからである。したがって、

「ルベディアンが、ルベドの法を説くとは、具体的にはどういうことなのか」

という問いの答えに正確を期そうとするならばである。それに対して私は、「どうか、この『ヘルメスの杖』を、始まりから終わりまで、全部読んでください」

と答えるのが、その問いに対する最も相応しい対応となるのである。

(4) 求めるものの違い

考え方の相違

ここで、段階論というものを、もう少し突き詰めてみよう。

すると、アルベディアンと、ルベディアン「教えを受ける相手に求めるもの」の相違点がよく分かる。つまりここでは、アルベディアンと、ルベディアンを、一種の「先生役」として扱ってみたいのである。

ではまず確認しておくが、アルベドの悟りからは、およそ段階論というものは出てこない。

なぜなら、真理として尊重すべきものを「それはアルベドの段階にある真理のみである」と見定めることこそが、他ならぬ「アルベドの悟り」の内容であるからだ。

よって、アルベド以前の段階において、自分たちや人類一般が歩む人生は、すべて「アルベドの段階に至るための低価値な前置き」に過ぎないものとなる。

他方、アルベド以上の意識段階（ルベド）があるとは、アルベディアンたちには想像もつかない。

だから、アルベディアンが教えることの全ては、あらゆる人々に対して「今すぐアルベドの段階に到達しなさい」と呼びかける「直結招致」となってしまう。

これを「一超直入如来地」と表現したアルベディアンがいる（谷口雅春）。

その帰結として、たとえ「アルベド以外にも、幾つかの意識段階がある」と仮定してもだ。アルベディアンとしては、それらの段階に、さほど重要な意義は、見いだせなくなってしまうのである。

つまり彼らの中では「主要、必須なのは、飽くまでも『アルベド』のみである。

それ以外の段階は、ただアルベドに到達するまでの、いわば“議論に値しない”程度の、通過地点に過ぎない」ということになってしまう。

だからこそ、アルベディアンは、全人類がアルベドに到達するのを“永遠に”待つのだとも言えるだろう。

人々に呼びかけ、あとは高みで待つのみ——アルベディアンにとって、それ以外の形をとった、自分が従事するに値する「宗教的役割」はあり得ない。

つまり「いったん待つのをやめて、相手の低次元居場所まで降りていく。そうして彼に直接働きかける」という考えは、アルベディアンにはないのである。

ただただ高次の座標で待ち続ける——アルベドの時間面である「永遠」は、アルベディアンによって、そのように使われるのである。

闇、虚無の無意義

こうしたアルペディアンの「アルペド以外に真理なし」という姿勢——これを敷衍すれば、当然のこと、彼らにとっては“闇”にも意義がなくなる。

すなわち、アルペディアンにとっての闇とは、光（アルペド）の減少傾向が進み、これが極まって、ついに光の不在（＝虚無）状態になっていることなのである。

要は虚無そのものに、自己主張はないということだ。

それは、ただ光が足りないだけ。ただ光が“徹底的に”不足しているだけなのだ。

アルペディアンにとって、虚無とは単に、アルペドが「完全に欠如している状態」に過ぎないのである。

だから「あまり闇のことを考えるべきではない」と彼らは言う。

闇に近い概念である“悪”についても「それについて深く考えるべきではない」とアルペディアンは主張する。それは善の欠如に過ぎないのだからである。

かの神秘主義者アウグスティヌスもまた、この立場に身を置いている。

アルペディアンの矛盾

しかし元来、闇や悪は、そんな単純なものではない。

一度アルペドから離れて思い起こしてみよう。

そうしてみると、闇や悪に、血みどろの戦いを挑まない限り、我々は「自我の確立」を実現することが出来なかった。善悪二元（二元論）とはそういう姿勢に他ならない。

そしてもちろん「自我の確立」なくしては、それ以上の座標への移行もまた、基本的には、まずもって実現出来ないのである。

たとえば「本来、自分に悪いところなどない」「本来、自分に暗い部分などない」と確信できる人間がいたとしよう。闇を重視しないアルペディアンは、そうした人間を見て喜ぶだろう。

だが、そうした人間が、自我を確立すると共に「罪の意識」という根源苦を獲得することなど、どうしてあり得ようか。

あまつさえ、この「罪の意識」こそが、恩寵の原理によって、アルペドへの参入を引き寄せるというのに、である。つまり「罪の意識」がなければ、人はアルペディアンになれないのに、である。

ところが、主体がいったん、恩寵の原理によってアルペディアンになってしまうと、その意識が、あまりにも著しく、アルペドの真理偏重になってしまうらしい。

つまり彼は、アルペド体験以降、アルペドの光と善とに圧倒されてしまうのだ。それこそ「光のみ実在」「善のみ実在」と唱えながら。

と同時に、アルペディアンは、闇や悪を、光や善の“欠如”として軽んじてしまう。闇

も悪も、また虚無も、無意義なものとしてナメられてしまう。

そうなるのである。むしろ、このような事を教えられた「アルベディアン」の信者たちは、むしろ向上への道を、踏み迷うのではないだろうか。

というのも、アルベディアンによる悪軽視の教えは、先に見たような、血みどろの「自我の確立」という必須的修養を、困難にしない訳にはいかないからである。

光と闇の両意義

さて、そのように、闇に意義を与えないアルベディアンに対して、ルベディアンは、光と闇（＝存在と虚無）の両方に重大な意義を見出す。

なぜなら、それら両方がなければ、かの「虚無からの存在の創造」という真理が合成されないからである。

そして、光と闇の両方を尊重した結果として、彼にはグラデーション・スケールが与えられる。

換言すればルベディアンは、闇から光にいたる、その全ての段階に、存在意義を与えられるようになるのである。

これをして、座標0から座標10までの、すべての段階に「不可欠」の保証が与えられる、と言ってもいい。

よってルベディアンにあっては、アルベディアンのように「アルベドに到達する以外のことは、ほとんど無意義」ということもない。

逆に、ルベドの法の受容者（生徒役）の、所属座標が一つ上がっただけでも、それはルベディアンにとっては「大いに有意義なこと」になる。

本当に、数多ある魂の中のたった一人であっても——そんな魂一人の「ほんの拳一つ分の向上」であっても——そうなのだ。

誰かの意識が“ほんの少しでも”ヘルメスの杖を登ったならば、それはルベディアンにとって、大いに祝福を送らずにはいられない慶事となるのである。

そして、そのような慶事は“一超直入如来地的な”アルベドへの参入と比べたら、はるかに高い頻度をもって起こり得るだろう。

だからルベディアンは、人々の向上を、アルベディアンのように「永遠に待つ」必要はない。

そうして待っているぐらいならば、その間にルベディアンは、各座標のあり方を詳述して、その段階論を十分に整理しておかなければならない。そうしなければ、人々の向上心が、無駄に踏み迷ってしまうからだ。

その意味で、ルベディアンは、アルベディアンよりもずっと、その仕事内容が、多岐多様で“忙しい”のである。

とてもではないが、謎めいた言葉を語りながら、人々の「アルベドへの到達」を永遠に待ってなどいられないのだ。

ルベディアンを占めるのは、すべて、梯子を登る後進の者たちへの気遣いである。

その気遣いによって、ルベディアンによる「段階論」は生まれるのである。

第5章 神に干渉する人間像

(1) 合一と等化

アルベド体験の特殊状態

クレアーティオ・エクス・ニヒロ（無からの創造）は、神の呼び名としてばかりでなく、いまやルベディアン¹の霊的認識の呼び名ともなった。

すなわち、虚無と存在を合成することによって、主体の心の中に、創造神と同じ輝きが現れたということだ。

しかし主体は、それを超常的な「神との合一」によって、成し遂げたわけではない。つまり「普段の自分とは別の状態になること」によって果たしたわけではない。

他方アルベドにおいては、人は「光そのもの」にならなくてはならなかった。アルベドは、まさに「光そのもの」「存在そのもの」の世界だからだ。

であれば主体の方もまた、それと同じものにならなければならない、ということになる。

しかし、人間の本性とは、そんなに崇高なものでも、純粋なものでもない。もっと陰りのある、わりあいに汚れた、不純なものである。

したがって主体は、一瞬でも「光そのもの」になるためには、極度の「特殊な意識状態」を作らなければならなかった。それはまさに「自分が自分ではない」という、極めて特殊な意識状態である。

そして、自分にとって、極めて特殊であるため、その状態を持続させることが出来なかった。これが「アルベド体験の短時間性」という性格につながることになる。

ルベディアン¹の自然体

そんなアルベドに対して、ルベドの悟りには、光と闇の両方が関わっている。そこでは、アルベドと同等量の光が用いられるが、同時に、闇の要素も不可欠なのである。

光と闇の共存。これは、人間の本性とも齟齬がない。人間誰にだって、その心のうちには、光と闇の両方があるからだ。

ただルベドの場合は、その光と闇の関わり方が見事に整理、整頓されている。互いが不用意に混合されることがない。

そしてまた、ルベドの場合は、その光と闇の結びつきが、神的なまでの、極大的なスケールで表現されることになる。

その点が、一般的な人間の心の「光と闇」とは大きく異なっている点であろう。この相違点については、どうしても特筆大書しておかなければならない。

しかし、光と闇という、そもそもの「与えられている材料」の根本性質は、ルベディアンであっても、一般的な人々であっても同じなのである。

そう、誰もが持っている本性、如来蔵は、ルベディアンと同じく、まさに「存在と虚無」「光と闇」で出来ているのだ。

よって、整理状態であれ、未整理状態であれ、その二つが同時に現れること自体は、人間の本性にとって、ごく自然な状態なのである。

だから、ルベドの経験は、アルベド体験のように、驚嘆的なものにならない。それは、無理をすることなく「自分の本当のあり方」を認めるだけで済むような体験となる。

事実、それは驚くほど静かな体験である。私の場合など、その時ただ「ああ、うん」と口にただけだった。そういう記憶が残っている。

たぶん「ああ」は一応の驚きであり、「うん」のほうは納得の言葉だったのだろう。

このような静けさを保持できるのは、ルベドの場合、グノーシス（悟り）の前も後も、主体が主体のままだからであろう。

ここでは主体は、普段の主体から変化して「神と合一」したのではない。主体は、その主体であるままに、ただ「神とも等しい」あり方となったのである。

したがって、これは「合一」ではなく、「等化」と呼ぶべき状態である。

神と等化しているイエス

神と等しくなる時。そのとき主体は、自分が人間であること、自分が闇を持つ弱い生き物であることを、片時も忘れてはしない。

しかも、そうであるからこそ、彼は「神と等しい自分」を確認することが出来る。そういう不思議な境地がここにはある。

また主体は、その経験の偉大さを認めつつも、同時に「自分の考えは、すべて狂気の産物なのではないか」という不安を、つねに心に保持することが出来る。

それほどにも、ここには熱狂がない。盲信がない。そういう冷静な境地がここにある。

主体は、かくも冷静に、自分が神に等しいことを確知する。それが「等化」である。

イエスもまた、こうした境地にあった。そのことを私たちに想像させる文章があるので、ここでそれを紹介しておきたい。

*ではイエスの役目は何かというと、人びとに、神の言葉をじかにのべることである。預言者と似ているけれど、預言者は〔神から〕聞いたことを話すでしょう。

イエスは〔神から〕聞くのではなく、自分が話す。ここが違う。自分の頭にあることを、自然に話している。ふるまいは預言者なんだけれども、預言者ではない。そこが、神の子だと考えられる。

で、神の「子」とはどういう意味かということ、親と分離している。イエスはイエスで

完結した存在。独立の人格なわけですよ。

けれど、この完結した人間存在が百パーセント、神の意思と合致している。つまりそれは、神の意思だとも見なければならぬ。こういう状態なんですね（橋爪大三郎）。

橋爪大三郎 (E) 大澤真幸『ふしぎなキリスト教』より*

イエスの「神との等化」を“外側から”見た文章として、これは、それ以上はないというほど見事な一節だと思う。橋爪氏の見識に、この首を垂れたいと思う。

しかるに一方の私は、「等化」という現象のあり方を“内側から”説明している。つまり等化経験者としての、内心を吐露している。

この内と外の呼応が、「等化」の本質を、読者に明らかにしてくれることを心より祈りたい。

(2) 神への干渉

等化の帰結

神との等化を語ったならば、そこからの当然の流れとして「神への干渉」について述べない訳にはいかない。

しかし、本題に入る前に、読者に若干の注意を促しておこう。それは、これから話すことは、決して「神からの干渉」ではない、ということだ。

というのも「神から干渉を受ける人間」の姿であれば、これまでだって、数えきれないほど言及されてきたからだ。神への恨みつらみを交えて、何度も何度も。すなわち、いわゆる「宿命論」「運命論」がそれである。

だが、ここで話そうとしているのは、飽くまでも、人間からの「神への干渉」である。換言すれば、人間のあり方が、何らかの形で、神の営みに“無視しえない”影響を与えるということである。

このように言うと、ずいぶんと思いがかった言葉に聞こえるかもしれない。まるでギリシア悲劇のプロメテウスのような。

しかしながら、実際にルベディアンになって、神と等化すれば、これはきわめて必然的な帰結なのである。

なぜなら主体は、いまや神と並列したからである。もっと正確に言えば、主体は、その心の一部に、神と並列した現象を持ったからである。

新約聖書には、イエスの言葉として「人の子が、全能の主の右側に座り」といった文言が出てくる。

それは全能の主の膝下に、でもなければ、全能の主の足下にでもない。イエスは神の横（右）にいるのだ。よって、これこそは「神と人間が並列している状態」の描写と言えるだろう。

包摂から外れる

神と並列することによって、主体はその時から「完全に神に包摂された存在」ではなくなる。つまり彼は、純粋な「被造物」ではなくなったのである。

主体はいま、神の手の内から離れた者となったのである。くどいかもしれないが、より正確には「そういう“部分”を持った」という事であるけれども。

敬虔なクリスチャンにあっては、いま一神教の前提が、ガラガラと崩れる音が聞こえることだろう。

というのも「神に等しく、神に包摂されない者」とは、要するに彼自身が、ある種の神であることを、主張しない訳にはいかない存在だからである。

こうなると、元来の神のほうでも、ここにいる主体のことを“完全には”意のままに操れなくなってしまう。つまりこの主体に対して、その「神の手」が届ききらなくなってしまうのだ。

そうだとすれば、偉大なる「神の御業」もまた、従来のごとく100%は、神の思い通りにはならなくなる。

換言すれば、これまで神が完璧無比に定めていた「運命、時空の経綸」は、今やどうしても「若干の不確定要素を含むもの」となってしまうのである。

この不確定要素とは、もちろん「神と並列した人間」からの影響を意味している。

すなわち「神が定めた運命」に、人間からの影響力が干渉するのだ。それによって、整然としていたはずの「神の御業」に思わぬ変化が引き起こされてしまう。

増幅する神の“善さ”

では、そのような「思わぬ変化」は、神にとって困った事態なのだろうか。

いや、そうではない。むしろ、この「神への干渉」によって、神に変化を与えるためにこそ、人間は神によって創造されたのである。

つまり「神への干渉」こそが、最も深いところでの「人間の存在理由」なのだ。

そして人間による、この「神の従来性に変化を与える働き」こそが、神にとっては「自身の限界を超えて、己を増大進化させる、唯一の手段」なのである。

もし、全ての事象が自身の手のうちにあったならば、である。すでに完璧なる神は、その状態以上のあり方には変化しないし、変化のしようもない。

それは何故かといえば、完璧なるものからは、何も生まれてこないからである。これは理として自明のことである。

しかし完璧なる神にあって、自分の内側にいる人間が「自分（神）の意図を超えた行為」をしたならば、どうなるだろう？

しかも彼が、神にとってみても、予想外なほど善い行為をしたならば、である。

そのとき神は、自身の「完璧という限界」を超えて、自身の“善さ”を増幅することが出来るだろう。

もちろん「すでに無限である神が、さらに増幅する」という言い方には矛盾がある。

しかし、ルベドの上（仮に座標11としておこう）には、この矛盾を解消する真理もまた、存在しているのである。

神の賭け

それはさておき、この「神への干渉力」は、人間の本源的な存在意義であるのと同時に、神にとっては、一種の“賭け”である。

かのアインシュタインは「神はサイコロを振らない」と言ったが、実際には「神はサイコロを振る」のである。

というよりは、賭けに負ける場合もあると覚悟しつつも、神はサイコロを“振らざるを得ない”というのが真相だ。

それというのも、現実には、神に干渉するのが、神と等化したルベディアンだけとは限らないからである。

つまり、実際に神に干渉するのは、潜在的にルベドの真理を保持している（＝如来蔵を持っている）人類すべてなのである。

これについては、永遠を知ったアルベディアンだけが「不滅の靈魂」を持っているのではないこと。誰彼かまわず、すべての人間が「不滅の靈魂」を持っていることが、その傍証となるだろう。

事実私たち人類は、永久の命を望む者も、永久の命を信じない者も、自分の命が消滅することを望む者も、その全てが、否応なしに「不滅の靈魂」を持っている。

ユングは好んで「呼ばれようと呼ばれまいと神は存在する」と語った。

ここでこの事情はそれと全く同じだ。望むと望まないとに関わらず、私たちは必ず、死んでは再生するのである。

そのように転生輪廻を繰り返す私たちは、一人残らず「不滅の靈魂」を持っていることになる。

これと同じように、私たちは一人残らず「如来蔵」という神の似姿を持っている。そして私たちは、この如来蔵を持つがゆえの「神への干渉力」をもまた持っているのである。

神の信頼

すなわち私たちは、誰もが「潜在的ルベディアン」なのである。そして、ルベディアンが神への干渉力を持つならば、どうしても「潜在的ルベディアン」もまた、否応なくその力を持ってしまうのである。

むろんその力は「ヘルメスの杖」を下に降るほどに、厚く隠蔽されるだろう。多くの人々にあって、それは胚芽や胎児の状態に過ぎないだろう。

しかし、それでも決して“非存在”ではないのである。そのように、ほとんどの場合は“ごく僅か”ではあるが、確かに全人類が「神への干渉力」を持っている。

そして「塵も積もれば山となる」の言葉どおりに、全人類の総合的干渉力は、神にとって、決して無視しえないものとなる。

すなわち、ここまで干渉者が拡大すればである。神にとっては、そこに自分に対する「いい影響」だけを望むことは、到底出来ないことになる。

自分の善性のみを増幅してもらうこと。それを人間たちに期待することは、とてもではないが出来ないのだ。

当然、多くの「人間からの干渉」のうち、その何割かのケースでは、逆に神の善性が、削減されることもあるだろう。だから常に、神の望むところは、一種の“賭け”とならざるを得ない。

サイコロを振れば、いい目が出ることも、悪い目が出ることもあるだろう。悪い目が出れば、その時は、サイコロを振った当人が、責任と負債を負わざるを得ないだろう。

それは賭け事師としては、当然覚悟しなければならないことだ。

しかし、それでもなお神は、いい目が出ることを期待しながら、敢えて、そのサイコロを振るのである。神はそれほどにも、人間を信じているのである。人間を信じ続けているのである。

(3) 予言からの超出

神の懐の広さ

人類は、潜在的にはすべて「ルベドの真理を保持している人間」で構成されている。つまり人類は、すべて潜在的ルベディアンである。それが如来蔵思想の帰結である。

そうした人類は、たびたび悪事をなしては「神の“善さ”の増幅」とは、反対の干渉を、神に与えてきた。

それは神にとっての苦しみであるし、神の一部である人類にとっても苦しみである。何より、その悪事をなした当事者にとって苦しいことであろう。

こうした苦しみは、歴史のうちに、数限りなく見つけ出すことができる。人類の歴史は、その大半が悪事の歴史でもあったからである。だから私など、「神さまが“人間からの干渉”を受け入れれば、そのとき全体としては、良いことよりも悪いことのほうが多いのではないか」

と、そのように思ってしまう。

まことに僭越な話であるが、ある意味で、神さまが心配になってしまうのだ。現代だって、私の目には、無信仰そのものの、非道な時代にしか見えないのだから。

だが、現実がそうだとしても、神は人間に、自分に対する干渉力を確かに与えた。それ以外には、完璧なる神が、その完璧の外側に超出する手段がないからである。

そう、神は、自分の掌の上で、人間が「自分の想定内の言動のみすること」をもって、善しとはしなかったのだ。神は、そのような狭量な方ではないのである。

逆に、神の懐は底抜けに広く深い。神にとっては、人間が「自分の想定外の“善きこと”をする」こと以上の喜びはないのである。

ちなみに、この善きこととは、おおむね、少しでも多くの人間が、少しでも高く「ヘルメスの杖」を登っていくことだと言えるだろう。

永遠という、ラプラスの悪魔

では、具体的に「人間が、神の想定外のことをする」とは、どういう事を言うのだろうか。

その説明の仕方は色々あると思うが、ここでは「予言が当たらなくなる」ということを言っておきたい。

そうしてみると、基本的に、アルベドの「永遠」には、人類全体の「完璧な予言」が存在する。

そもそも、放射的直線の太さである「無限」には、全人類（全宇宙）の個性と情報が組み込まれている。

そして、その「空間の絶対情報」から自動算出された未来予想——それが、放射的直線の長さである「永遠」の片側（未来側）を形成しているのである。

だから「現在」が、アルベドの「未来予想のルール」を、そのままスライドしていただければ「完璧な予言」は、そのまま「完璧な予言成就」に転化し続けるだろう。

ある意味で、ラプラスの悪魔は、ここにいるのである。ラプラスの悪魔とは、「ある時点において作用している、全ての力学的、物理的な状態を、完全に把握できるならば、宇宙の未来をも確定的に知りえるだろう」

という考え方である。

つまり、完璧な現状把握ができれば、完璧な未来予想もできるだろう、という考え方だ。

ただし、そのとき必要とされる知性が明らかに超人的なので、これを敢えて「悪魔の知性」になぞらえた訳である。これはフランスの数学者、ラプラスによって提唱された考えだ。

ただし、ラプラスは、因果的必然性、つまり合理性の中に「ラプラスの悪魔」がいると考えた。要するに「自我の確立段階」に、それを見つけようとしたのである。

しかし合理性など、結局は、地上的で脆弱な知性でしかない。

それは、アルベド侵入の力によって、いくらでも捻じ曲げられてしまう。実に、そのような低い強度しか持っていない儂い知性なのだ。だから、そこに「ラプラスの悪魔」を探しても無駄である。

本当にラプラスの悪魔を探すならば、我々は、どうしても、アルベドの「永遠」に足を踏み入れなければならない。

逆に言えば、アルベドの「永遠」が持っている「完璧な予言」ならば、まさに、この「ラプラスの悪魔」に等しい、確定的な未来を教えてくれるはずなのである。

予言を外れさせる力

もしも、この「永遠」の情報を、アルベドとの合一によって、主体が「日常の次元」に持って帰れたとしたら、彼の予言は、100パーセント正しいものとなるだろう。

まさに「未来のすべて」が、そこにはあるからだ。

しかし、現実には「100パーセント当たる長期予言」を口に出来た予言者は存在しない。

もちろん短期の予言であれば、それも不可能ではないだろう。けれども、それなりに長いスパンとなると、どうしても予言の“ハズレ”が避けられなくなる。

これに関しては、たとえノストラダムスのごとき偉大な予言者であっても、決して例外にはなっていない。

むろんそれは、絶対の世界の産物である「永遠」を、相対的な日常世界に降ろした際に生じる「アルベド侵入としての限界」でもあろう。

つまりアルベド侵入に付きものの「純粋性の低減」の問題が介在するということがある。

しかし、それだけではない。もっと重要な力が、ラプラスの悪魔の邪魔をすることがあるのだ。

そして、それこそが、まさに人間の「神への干渉力」なのである。それはアルベドの神が敷いた「未来のルール」に、しばしば、幾ばくかの歪みを与えることになる。

そのさい、決して「大きな干渉力」が必要とされる訳ではない。

たとえ、発端は小さなズレであっても、場合によっては、その小さなズレが、目を見張るような大きなズレへと、育成していくこともあるからだ。

こうしたパターンは、力学的には「バタフライ効果」と呼ばれている。ブラジルの一匹の蝶（バタフライ）が羽ばたくことで、テキサスで竜巻が起こるかもしれない、といった意味合いだ。

事実「神への干渉力」が、未来予知に大きな影響を与えるのは、こういった効果の産物であることが多い。

となれば、この「神への干渉力」によって、幸せな予言が外れてしまう事もあるだろう。

しかし逆に、この力によって、不幸の予言が外れてくれることもある。不幸が多いこの時代にあっては、これは一つの福音であろう。

運命からの自由

精神史を見渡すと、特定の宗教や予言者が、宿命論や、運命絶対論に傾倒しすぎて、人々から、自由さと活気を奪うことがあるのに気づく。

キリスト教の終末論や、ノストラダムスの「恐怖の大王」の予言には、そうした暗い要素が、確かに含まれていた。

しかし、ルベディアンだけは、そうした風潮に、堂々と異を唱えることになる。彼は、人間の「神への干渉力」が、予言の絶対性を打ち破ることを知っているからだ。

だから例えば、カルヴァンの二重予定説（＝神の知性の絶対性）なども、私にとっては、決して、絶対のものにはならないのである。

つまりルベディアンは、確信をもって「宿命からの自由」「運命からの自由」を説くのである。

といっても、ルベディアンは、その存在基盤のうちに、アルベディアンを含んでいる。

だから彼は、アルベドの真理のもとに、ときに予言をすることがあるだろう。つまり、彼の持ち物である「永遠」の特性を活かすことがあるだろう。

しかしルベディアンである彼は、同時に「予言が外れることもある」という事もまた予言するだろう。彼は「永遠」と共に、人間の「神への干渉力」のことも、ちゃんと知っているからである。

第6章 人間＝神、神＝人間

(1) 闇に接する神

1 + 0 = 1

ルベドの神（創造神）は、自身のうちに、虚無の暗闇を持つ神である。

暗闇を持つ神。もはや私は少しも気にならないが、このような神を、いくぶんか不穏なものとして感じる方もいるだろう。また、そのように感じる人の数は、私が考えるよりも、ずっと多いのかもしれない。

というのも、これまでの諸宗教では「神は、光のみに満たされた存在である」という既成概念が根強かったからだ。とくに正統派のキリスト教で、その傾向が著しい。

もしも、そのような「ただ光に満ち溢れているだけの神」に出会うことを望んでいるなら、むしろ彼らには、アルベドの汎神を引き合わせたほうが穏当だろう。

それというのも、かかるアルベドの神には、表面上、影も闇もないからだ。永遠的な許容性によって影をも呑み込む「救済の神」、闇をも光に変える「遍照光明の神」がそこにおられる。

しかし、ルベドの神、暗闇から光を放つ創造神もまた、厳密に考えれば、光のみの神、実在のみの神、善のみの神なのである。

それについてここでは、簡単な算数を用いて説明しよう。

そもそも、私たちには暗闇にしか見えない座標にも、まだ微かな光が宿されている。

そして、その先にある「完全な暗闇」にしても、それが「虚無」であるならば、これを数字で表せば「0」に過ぎないものである。

そして、無限にして一なるアルベドが、数式的に「 $\infty = 1$ 」だとすれば、ルベドは、その「1」に「0」が加えられたもの、ということになる。式で表せば「 $1 + 0$ 」である。

この足し算は小学校で習うものであり、その和は、言うまでもなく「1」である。これは要するに「もとのまま」ということだ。

したがって、それは「アルベドの光は、ルベドに至っても、いっさい失われていない」ことを示しているのである。

そうだとすれば、前述したとおり、ルベドの創造神もまた、光のみの神、実在のみの神、善のみの神ということになる。

闇はそれを理解した

とはいえ、創造神が闇を含んでいることは、非常に重要である。

むしろ創造神が闇を含んでいることは、宗教的道理として“必須”なことなのである。しかも、世界が真実に、光で満たされるためにこそ。

一例を挙げてみよう。かの『ヨハネによる福音書』には、「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」

と書かれている。確かに暗闇が光を理解することは難しそうである。

しかし、そうやって暗闇が、光（神）を理解しない限りは、そこに神の手が届かない、闇の領域が残ってしまう。それはつまり、無理解の城壁に囲まれた、堅牢な城塞都市のようなものだ。

そして、そのような領域があるかぎり、神の全能性、普遍性は、どうしても一部損なわれてしまっていることになる。

ならば神が、本来的な、自身の全能性と普遍性を取り戻すには、どうしたらいいのだろうか。

それについて考察するために「暗闇は光を理解しなかった」という、最初の文章に立ち帰ってみよう。

おそらく、暗闇が光を理解できないのは、闇にとって光が「自分とは無縁の余所者」としか思えないからだろう。

だから、光がどんなにいいことを言っても、それが耳を素通りしてしまう。つまり、自分とは関りが無いほど、その声が遠くに聞こえてしまう、と。

これが率直な闇の言い分だと思う。たしかに、他人事の“立派な高説”など、誰だってまともに聞いてもらえない。

そんなものを聞かされたら、私だって「ええ、ご説ごもっともですが、それは自分とは、関わり合いのない話でございます」と皮肉を言いたくなってしまう。

光は闇の中で生まれる

しかし反対に光が「私は己のうちに闇を含んでいます。それどころか私は“闇そのもの”と直接結びついているのです」と自己紹介したらどうだろう。

このとき闇の耳に、その光の言葉は「きわめて身近な声」として聞こえるのではないだろうか。

余所者の声ではなく、近隣者、近親者の声として、それは聞こえるのではないだろうか。

そう、闇が断じて「それは自分とは関わり合いのないものである」とは言えない声として。

ルベドの悟りとは、まさに、そうした声が体系化されたものである。

というのは、アルベディアン即ち「光の体現者」であった者が、闇である虚無を掴んだ時に成立するものこそが「ルベドの悟り」であるからだ。

すなわち、私はいま、ニグレド（座標0）への下降と、その座標への到達について振

り返っているのである。

アルベディアンはその時、自分自身を「暗闇そのもの」と重ね合わせなければならない。

まことに、そうしなければならない。だって、闇がないところでは、発光現象（光の創造）は、決して起こらないのだから。

光のなかで光は生まれえない。ただ闇の中でのみ、光は閃光として生じるのである。

そうやって自分自身を暗闇にすることで初めて、主体の中に、ルベドの神、創造神は現れる。そしてそれは、暗闇と創造神のあいだに、何らの隔壁もないことを意味する。

よって、こうなった時の主体は、いわば一人二役の状態にある。

つまり彼は、まず「光の言葉を話す授け手」である。

そして、その次に彼は「その光の言葉を受けとる闇」でもあるのだ。主体の中には、その二つの要素が、両方とも入っている。

すなわち、主体は自分で言葉を発し、その言葉を自分で聞いて理解するのだ。

むろん、自分で言っていることが、自分で分からないはずがない。だから、暗闇としての主体は、そのとき堂々と、こう言うだろう、「闇である私は、いま光を理解した」と。

なにせ、その光を放ったのも、自分自身なのだ。それを理解できるのは、当たり前の上にも、当たり前のことであろう。

こうして『ヨハネによる福音書』の「暗闇は光を理解しなかった」という一文は、いま抜本的に更新されることになる。

すなわち神の光は、ついに世界のすべての領域にまで波及したのである。これによって神は、ようやく真なる「全能の普遍者」となったと言えるだろう。

(2) 人格を持った神

抽象的ではない神の姿

第二、第三福音書、つまりこの『ヘルメスの杖』は、「人間の神化」をダイジェスト風に追った文書である。

私は、キリスト教正統派の「↓」「神の人間化」への偏向を補うものとして、これを書いた。要するに「↑」によって「↓」を補償する試みである。

しかし「ユダヤ - キリスト教」の伝統には、最後の最後、中枢の中枢で、意外にも「↑」を示唆する要素が見出される。

それは何かと言えば、かの創造神が、抽象的な神性ではなく、人格をもった神であるという点だ。

まさしく、聖書に描かれた創造神は「人格」を持っている。この神は、アブラハムやモーセなどの預言者たちと人間的な会話をするし、何となればエデンの園を歩くことさえするのである。

すなわち『創世記』の第3章に、

その日、風の吹くころ〔アダムとエヴァに〕主なる神が園を歩く音が聞こえてきた。

と書かれているのだ。それはあまりにも生々しい「人間的な神」の姿であると言わざるを得ない。

その他にも、聖書にあらわれる様々な「神の言葉」を読む限りにおいて、明らかに、この創造神は「人格と感情」を持っていると考えられる。

つまりは、確かな事実として「神の座標に、人間的なものがある」のである。

隠された奥義

このような神の人間性について、「天地創造を神話風に語るためには、そのほうが都合よかった。そして、そのような人間的な要素が、その後の聖書の展開にも、慣性的に引き継がれていってしまった」

と言ってしまうえば、それまでだ。

しかし私は、ここに別の理を見る。すなわち私は、ここに「かつて人間が、神の座標

まで高まったことがあるからこそ、創造神に人格が付与されることになった」という奥義を見ずにはいられないのだ。

なぜというに、かつて『聖書』を執筆したのも、他ならぬ“人間”だったからである。この執筆者こそは、遠い過去に「人間の神化」を果たした人物だったのではあるまいか。いや、そこまで言い切るのは危険かもしれない。

しかし、いずれにしても、人間が執筆したはずの『ジェネシス（創世記）』には、驚くほどの神的な叡智が込められている。そこには確かに「人間＝神、神＝人間」の痕跡がある。

ユダヤ - キリスト教の不思議

むしろ不思議なのは、これほど「人間的な神」が活躍する宗教（＝ユダヤ・キリスト教の正統派）で、神と人間とが、ああも絶対的に隔絶されたことである。

すなわち「↑」の方向性が、徹底的に封じられたことだ。

私は今回、東洋の伝統に生きる者として、キリスト教圏とは異なる場所で「↑」のベクトルを登っていった。

ここで言う「東洋の伝統」とは、おおよそ「仏教的エートス」と同じである。仏教に含まれるグノーシス（悟り）の伝統によって、私は「↑」のベクトルをよじ登った、ということだ。

だが、これはキリスト教圏では、およそ肯んじられない、愚かしい暴挙である。紛れもなく「大きな犯罪」である。

*ここで記憶しておいてほしいのは、神に近づこうとする、ということが、ユダヤ教の価値観では最大の罪だということです。だから、自分は神だ、とか、自分は神の子だ、などということを主張するやつらがいたら、大犯罪人だということになります。

ユダヤの人々がイエスを恐れ、嫌悪したのも、そういうところに原因があるのです。

三田誠広『聖書の謎を解く』より*

このような犯罪的暴挙を行うことは、現代のキリスト教圏で生きる人たちでは、考えもつかないだろう。つまり、罪を犯したくても、その罪自体を想像だに出来ないだろう。神と人間が徹底的に隔絶された世界では、そのようになるのが道理である。

しかし東洋人の私には、聖書の中の「人格的な神」が、自分を呼んでいるように感じられた。すなわち神が、人間である私に対して、ひそかに手招きをしているように感じられたのである。おいでおいで、と。

神の手招き

そのとき神は、あたかも小声でもって、次のように言っているかのようだった。

「小さき東洋人よ、私の声を聞くがよい。

人間であるお前が、神である私のもとに来ようとする事は、西洋人からは、倨傲の罪（おごり高ぶること）と呼ばれるだろう。かかる倨傲のそしりは、お前にとって、それを超えることを躊躇わせる“障壁”となるだろう。

たしかに、その障壁を超えることは、キリスト教圏では、大きな“罪”とされている。

そのように犯罪扱いされている事であれば、これを敢行するのは、遠い島国に住むお前にとっても、決して気持ちのいいものではないだろう。

だが東洋人よ、それでもお前は、かかる“罪”のそしりを乗り越えよ。“罪の宣告”を受け入れよ。その心理的負荷を甘んじて受容せよ。

そうして私のもとまで登ってこい。ここで私の孤独を癒し、私とともに語らえ。

大きな声では言えないが、私はここで人を求めている。いな“人格”を求めている。私と同質の精神を求めて、ずっとここで待っているのだ」

神はこのように言っているかのようだった。

もしかしたら神は、ずっと昔から、これと同じ事を、小声でつぶやいていたのかもしれない。それこそ何千年も前からずっと、ユダヤ - キリスト教の伝統に生きる、あまたの西洋人に対しても。

だが、誰もその声に応えようとしなかった。社会的通念となってしまった「罪の意識」が、西洋人のチャレンジ精神を挫いてしまったからだ。

そう考えると、秘匿されていただけで、「ユダヤ - キリスト教」の中にも「人間＝神」のイメージは、常にあったのかもしれない。私にそう思えてくるのである。

(3) 異端から正統へ

異端と正統の接合点

さて、ルベドに至って、主体の「人間の神化」は、一応の完結を迎えることになった。「等化」という形で「人間＝神」の理念が実現したからである。

あらためて整理しておこう。

キリスト教正統派における神は「創造神」である。そして、その創造神の役割は「無からの創造」である。これがキリスト教正統派における“神の定義”である。

この神の定義が、人間にも適応された。すなわち、ルベディアンとなった人間の心中にも「無からの創造」があることが証明されたのである。これが神との「等化」である。

こうして大錬金術における主体は、座標 9 アルベド、座標 0 ニグレド、座標 10 ルベド、という変容の果てに「人間の神化」「人間＝神」の境地まで達した。

そして、それは実は、錬金術という異端思想が、キリスト教正統派との接点、接合点を持ったということでもある。

というのも「人間＝神」は、当然「神＝人間」と同じものであり、それは「神が人間になった」という言葉とも同一だからだ。

そしてもちろん、キリスト教とは「神が人間になった」ということを根本教義とする宗教である。

そう、キリスト教とは「神が、イエス・キリストとして人間になった」ということを、高らかに宣言した宗教なのである。

ということはだ。キリスト教にとって異端であったはずの錬金術は、その「等化」という高みで、キリスト教正統派の領域へと、無理なく転向してしまったのである。

錬金術師からキリストへ

よって「等化」のステージにあっては、錬金術師は、もはや「異端者」とは呼ばれない。そのように誘われる謂われは全くない。

では、この完成された錬金術師は、クリスチャンから何と呼ばれるべきだろうか。

それは当然『神＝人間』を体現する者の象徴的名称である「人の子となった神」、あるいは「人の子」であろう。

イエス・キリストが、自分自身のことを「人の子」と呼んだように、ここでの主体もまた、それと同じように呼ばれるべきだろう。

かくして彼は、イエス・キリストと「人の子」の名称を共有することになる。

したがってこれは、第二のキリストの誕生であり、キリストの再臨である。クリスチャンが二千年の長きにわたって待ち続けた、真のイースター（復活）である。

では、再臨のキリストは何を語るだろうか。

いや、もう語り始めているのである。それがこの「福音書シリーズ」であり、最終巻に向けて、私は語るべきことを語り尽くそうと、いまも努力しているのである。

第7章 神と黄金

(1) 物質としての金

錬金術師たちが求めたもの

本書を終えるにあたって、これまでとは少し違う角度から「錬金術」についての話をしてみたい。

今さら言うまでもないが、第二、第三福音書『ヘルメスの杖』は、錬金術の作業内容を追った書である。

そして錬金術とは、一般には「化学的に金を製造しようとする技術」として認知されている。それが社会的なレベルにおける、錬金術というものの理解である。

しかし私は、『ヘルメスの杖』において、これまでほとんど「物質的な金」については、言及してこなかった。むしろ私は、錬金術師たちが求めていたものが、物質的な金ではないことをこそ、強調してきたのである。

* 真に錬金術師たちが求めたのは、結局「物質的な金や銀」ではなかったのである。彼らが求めたのは——彼が高尚であればあるほど——「銀のごとく価値ある悟り」であり「金のごとく価値ある悟り」だったのだ。

序説『杖を持った神』より*

そのように「金や銀は、あくまでも心理現象の寓意である」「それは決して、物質的な金銀を指しているのではない」というのが、私の立場だったのである。

しかし、現実の錬金術師たちが体験した“心理現象”は、つねにフラスコや炉、また硫黄や水銀と共にあった。その悟りの道程には、つねに「物質的な要素」が伴っていた。

つまり彼らは、決して殺風景な道場で、その瞑想修行を行っていた訳ではないのである。

物質的な金が意味するもの

そのように、彼ら錬金術師たちは、少なくとも「物質としての金銀」と無縁な訳ではなかった。物質的な環境の傍らにこそ、彼らの宗教的瞑想もまた、成立していたのである。

そうであるならば「現代に生きる錬金術師」を自認する私もまた「物質としての金銀」に幾ばくかは言及しなければならないだろう。

ただし銀については、ここでは、その言及を割愛したい。というのも、錬金術師たちの最終目的物質は、銀ではなく、あくまでも黄金であったからだ。

では、どうして術師たちは、金を求めあぐねたのだろうか。どうして金でなければならなかったのだろうか。

これについてユングは、次のような示唆的な言葉を伝えている。原典は、錬金術師ミヒャエル・マイアーの書に記された言葉である。

*太陽は神の像であり、心臓は人間の内部に刻印された太陽の似姿であるが、これはちょうど黄金が地の内部における太陽の似姿であるのと同じである。

従ってまた黄金は「土からなる神」という名で呼ばれる。それゆえ神は黄金において認識される。

ユング『心理学と錬金術』池田紘一・鎌田道生訳より*

神と黄金

上のマイアーの言葉を、少し読みやすくしてみよう。

太陽は神の像である。そして心臓は「人間の体内に刻印された、太陽の似姿」である。これはちょうど黄金が「地の内部における、太陽の似姿」であるのと同じである。

これによって黄金はまた「土からなる神」という名で呼ばれる。それゆえ神は、黄金において認識される。

「神は黄金において認識される」——じつに驚くべき、率直で平明な言葉だ。

極論すれば、この一言が錬金術の全てであり、まさに錬金術が一つの宗教たりえる所以である。

もちろん私もまた、この言葉を、最大限に尊重せざるを得ない。自分自身を宗教的錬金術師と規定しているのだから、それは当然のことであろう。

それにしても、黄金をして「土からなる神」とは、言いえて妙である。

土は手で触れられる、極めて質感がハッキリとした素材だ。地水火風の四大のうちで、最もスピリチュアルな抽象性が低いのも「土」である。むしろそれは、物質的な具象性の権化と言ってよいだろう。

*西洋の魔術では、四大元素の中で地（土）の元素がいちばん人間になじみやすいとされている。他の3つが概念的なものであるのに比べて、地の元素は「実物」「現実」という側面が強いからだ。

ヘイズ中村著『天使と悪魔の事典』より*

地といい土といい、実際それは「誰でも見ることが出来、触れることが出来るもの」の代表格である。都会に出かける必要もない。それこそ田舎にいて膝を屈めれば、誰でも土に、じかに触れることが出来るだろう。

したがって「土からなる神」としての黄金とは、誰によっても実感できる神、まさに「物質としての神」として解釈することが出来る。

そして言うまでもなく、私たちが生きているこの世界は「物質の世界」である。

だからこそ、この世界において「神の顕現」がなされる時が来たならばである。その神がとるべき最も相応しい姿は「黄金＝土からなる神」となるのではないだろうか。

私としても「物質の世界において、万人に公示できる神の姿」を求めるとしたら、これ以上に適切なものは、到底探し出せそうにない。

(2) 小宇宙と大宇宙

確認しておくべきこと

ここで、どうしても確認を取っておきたい事がある。

それは、心理的な錬金術のシンボルとして見れば、アルベド（汎神）は「銀」にあたり、ルベド（賢者の石、創造神）は「金」に当たるということである。

そして、これは個人がグノーシス（霊的認識）によって体得できる、マイクロコスモス（小宇宙）の摂理である。

すなわち「賢者の石」とその同義語、とりわけマイクロコスモスである。

ユング『結合の神秘Ⅱ』池田紘一訳より

その一方に、物質としての銀があり、物質としての金がある。これは物質的な宇宙の一部であり、それゆえマクロコスモス（大宇宙）の摂理下にあるものだと言えるだろう。

そして、錬金哲学の核となるのは、この二つの宇宙、マイクロコスモスとマクロコスモスの共鳴なのである。

*〔錬金術にあっては〕人間は全宇宙の中心であり、整合的存在なのである。整合的存在とは、マイクロコスモスとマクロコスモスの中間にあって、すべての点において機能的に感応し合う存在ということである。

澤井繁男『錬金術』より*

*人格内で体験された神の認識から導かれる関係は、一致の状態として最もうまく記述される。これは、マイクロコスモスとマクロコスモスの間の一致である。なぜなら、ある調和が達成され、個人は宇宙との対等な結合をなしたからである。

イラ・プロゴフ『ユングと共時性』河合隼雄、河合幹雄訳より*

錬金術師たちの努力

そしてそれは「本性的に、外面と内面、つまり、物理的環境と心理的事象という対立物を結合する」という（イラ・プロゴフ）。

つまり、心の中の黄金は、物質としての黄金を現出せしめるのである。それが錬金術師たちにとっての「マイクロコスモスと、マクロコスモスの一致」であった。

だからこそ錬金術師たちは、殺風景な道場ではなく、黄金を合成するための道具が揃った作業場で、その神秘的な瞑想を行ったのである。

すなわち、彼らはこう考えたのだ。

「内的な“神のグノーシス”の成果として、物質としての神である『黄金』を手に入れること、それが我々の最終的な目的である。

ならば身近に『黄金製作所という環境』を作ることが、その成就のための近道になるのではないだろうか。そこには、物質的な金が生成されるために必要と思われるものが、おおよそ全て揃っているのだから」と。

事実、錬金術師たちは、その最良の環境である作業場（黄金製作所）で、金が合成できるものと信じていた。

自分の心が、神であり、太陽であり、黄金であるならば、その手には、必ずや「物質としての黄金」が掴めるはずだからである。

それこそが彼らにとっての「一致」ということだった。

これが錬金術師の確信である。心的に完成された錬金術師は、かかる一致の理によって、必ずや「物質としての神である黄金」「地の内部における、太陽の似姿である黄金」が掴めるはずなのだ。

誠実な錬金術師の心理

だが、ここで一つ注意してほしい。この「マイクロコスモスとマクロコスモスの一致」は、物質的な金銀だけを求めた、かの“山師的”錬金術師たちの考え方とは、全く違うことを、である。

誠実で王道的な錬金術師たちは、まず基本的には、心理的に錬金術を極めようとした。たとえ彼らの傍らに、炉や、フラスコや、ビーカーがあったとしても。それらを使って彼らが、蒸留や加熱を繰り返していたとしても、である。

そうして錬金術師たちは、その究極の心理的ステージ（＝ルベド）においてこそ「マイクロコスモスとマクロコスモスの一致」が起ると想定した。そして、その発動によって初めて、黄金は自分たちのものとなるのだと。

しかし、過去の錬金術師たちは、現実には、それを実現できなかった。

実現できなかった理由は三つある。

まず、いくら立派な「黄金製作所」を作っても、錬金術師たちの科学技術は「材料の

合成」の範囲に留まっていたこと。残念なことに、金は化合物ではなく、何によっても合成のしようがない「元素」であった。

第二に、彼らがまだ、真実には「内心の神」で出会っていなかったということ。つまり錬金術師の中で、ルベドの悟りを、真の意味で体得した者はいなかったということだ。

そして第三に、まだ来るべき「その時」が訪れていなかったこと。これは神の計画性に基づくことであって、人間心ではどうしようもないことであった。

けれども、翻って私は、現代という「来るべき時代」に、ルベドという内心の神に出会った。これをグノーシスした。それによって「完成された錬金術師」となった。

しかも私は、元素である金をつくれる「黄金製作所」をも見つけたのである。それが具体的に何を指すかは「第8（17）福音書」で説明することになるだろう。

だから私は、いま満を持して、先達の無念を、ことごとく拭い去ることが出来る。彼らの不達成を、達成という言葉に塗り替えることが出来る。

その証を、読者は「福音書シリーズ」の最終巻で見ることになるだろう。私のマイクロコスモスのなかの神と一致した、マクロコスモスの黄金が、そこには明瞭この上ない形でもって提示されているはずだ。

再臨のキリストによる福音書 3-V

著 正道

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
